《「源氏物語から考える古典の楽しみ方」・資料》

現在の源氏物語は五十四帖（巻）からなる。そして、この五十四帖の物語は一般的に、その内容面から第一部、第二部、第三部の三つに分けられる。

第一部は光源氏の若き日の恋と大きな過ち、失意の流離、復権してから手にする多くの愛と栄華を描く。第二部は栄華の絶頂の中で、若き日の報いとして光源氏に起こる大きな出来事、紫の上との死別、哀しみの中での光源氏の終焉などを描く。そして、第三部は光源氏の死後の宇治を舞台に、主人公・薫が匂宮とともに宇治の姫君たちを巡って繰り広げる叶わぬ恋の物語を描く。

源氏物語の巻々の名前と順序は次のとおりである。

《第一部》

①桐壺　②帚木　③空蝉　④夕顔
⑤若紫　⑥末摘花　⑦紅葉賀
⑧花宴　⑨葵　⑩賢木　⑪花散里
⑫須磨　⑬明石　⑭澪標　⑮蓬生
⑯関屋　⑰絵合　⑱松風　⑲薄雲
⑳朝顔　㉑乙女　㉒玉鬘　㉓初音
㉔胡蝶　㉕螢　㉖常夏　㉗篝火
㉘野分　㉙行幸　㉚藤袴　㉛真木柱
㉜梅枝　㉝藤裏葉

※第一部の傍線の巻は玉鬘系（これについては後ほど触れる）。

《第二部》

㉞若菜上　㉟若菜下　㊱柏木　㊲横笛
㊳鈴虫　㊴夕霧　㊵御法　㊶幻

《第三部》

㊷匂宮　㊸紅梅　㊹竹河　㊺橋姫
㊻椎本　㊼総角　㊽早蕨　㊾宿木
㊿東屋　(51)浮舟　(52)蜻蛉　(53)手習
(54)夢浮橋

こうした巻々には各巻でほぼ完結する短編的なものもあれば、相互に結びついて物語を大きく進展させていく長編的なものもある。また、大きな構成・構想を持つ作品であるだけに、多くの登場人物とストーリーの展開が極めて複雑に絡み合ってもいる。

この物語は一度に全巻まとめて書き上げられたのではなく、いくつかのまとまった巻々に、さらに新たな巻々が書き加えられて、現在の形になっていったと考えられている。

（『源氏物語を読んでみよう』中永廣樹著〈今井出版〉より）

○「週刊 読書人」令和6年（2024年）4月19日号より

著者から読者へ

源氏物語はおもしろい

中永廣樹

二月に米子市の今井出版より『源氏物語を読んでみよう』を出版した。幸いにも予期したより多い読者を得たのだが、地方においても書店や出版社は苦境にある。その大切な文化としての地方出版を少しでも支えられないかと考えたことも出版の動機である。けれども、出版の大きな動機は、源氏物語のおもしろさ、奥深さをいささかなりとも一般の皆さんに伝えたいということにある。

拙著の「はじめに」に記したように、一般の読者は教科書などで習ったことから源氏物語を一応知ってはいるが、その本当のおもしろさはわからないという方が多いと思う。また、私は県の教育行政職在職時や退任後に、源氏物語や他の古典作品を講義、講演する機会を得た。しかし、この講義・講演でも源氏物語の本当のおもしろさを理解してもらうには、時間的・内容的に限界があった。

こうしたことから、この度、一般の方や若い方で源氏物語に興味・関心を持っている方を対象に、その本当の面白さを伝えたいと考え、源氏物語の入門書として本書を書いた。

では、源氏物語はどこがおもしろいのか。それは、この作品が現代の文学作品に比肩できる名作としての魅力を持っている点である。

その魅力とは、まず、今日的なテーマを持っていること。長編作品としての大きな構成の中に、人生とは何か、生きる上で大切なものとは何か、人を愛するとは何か、人の心とは何かといった、不易・不変なテーマが示されているからである。現代に生きるわれわれは千年の時空を越えて作者・紫式部が問いかけてくるこの問いを受け止めるだろう。

さらに、魅力として、その緻密で味わいのある文章の素晴らしさがある。リアリズムと心理描写の巧みさはまさに現代文学である。登場人物の考え方・感じ方、行動のし方が自然や情景の描写と見事に融合して、リアルに、克明に描かれる。本書ではその文章を深く味わってもらうために、名場面といわれる部分の原文を抜き出し、それに現代語訳と簡単な鑑賞を付している。

この作品の魅力はまだまだあるが、いずれにせよ、この物語の書かれた時代は摂関政治全盛の時であり、政治的に、社会的に男性優位の時代であった。優れた洞察力、人間観察力、教養を持っていた紫式部は、むしろ女性であったが故に、そうした社会の、そうした人間の在りようを自由に、そして鋭いまなざしをもって描き出すことができたと思う。

われわれはその紫式部の伝えたかった「大切なこと」をそれぞれに見つけたい。本書がその一助となれば望外の喜びである。（なかなが・ひろき＝元鳥取県文化振興財団理事長）

中永廣樹著

源氏物語を読んでみよう

紫式部が伝えたかった「大切なこと」

A5判・160頁・1540円
今井出版
978-4-86611-375-3
TEL. 0859-28-5551